

体育授業（陸上競技）づくりの実践学習

— 「保健体育科教育法（陸上）」の授業報告—

黒須雅弘*・木村華織*

はじめに

近年、教員養成課程のプログラムを扱っている諸大学では、教職関連科目における模擬授業の導入成果について多く報告されている¹⁾。授業内での模擬授業の実施自体は、おそらく、そう新しい取り組みではなく、以前から実施されてきたことと思われる。しかし、模擬授業の実施することによる学生の学習効果を分析したり、教師役学生の言葉づかいや立ち振る舞いなどの指導方法について科学的観点から客観的に評価した研究報告を見受けることになったのは、この10年間程度である。

本学における教職課程プログラムも学部創設以来、10年を迎えることになる。「保健体育科教育法」の授業内容も開講以来、スポーツ種目を実践的に取り組むことによる方法論の学習ではなく、将来体育教員となり、教科を指導する専門家として授業の準備・運営・評価ができるようになるための授業内容へとシフトしてきた。先に触れた先行研究同様に授業の効果や評価手法についても精査が必要となっている時期と考えている。

本稿では、東海学園大学スポーツ健康科学部の教職過程科目に含まれている「保健体育科教育法（陸上）」の運用方法について報告する。

1. 「保健体育科教育法（陸上）」について

1-1. 開講状況

本科目は、スポーツ健康科学部3年生次の春学期に開講しており、教員免許状（保健体育）取得を希望する学生は必須科目としている。同学部1年生次を対象に開講している「スポーツ方法学実習」（以下：方法学実習）においても陸上競技を扱っているが、実技形式で実践的に方法論を学ぶ方法学実習に対して、「保健体育科教育法（陸上）」（以下：教育法）の授業では、受講生が模擬授業を行い体育実技授業の運営、指導方法を学習する（表1）。

模擬授業の実践を取り入れた授業運営を行うに際して、教員養成教育を目的に模擬授業を取り入れた白石（2013）の授業実践報告を

表1：「保健体育科教育法（陸上）」模擬授業の構成（例：第1時限目の場合）

授業進行	担当者	段階（学習過程）	内容
9:00~9:10 ・模擬授業担当者の確認。 ・模擬授業担当者から各グループ内の生徒役学生へ学習指導案の配布。	教師役学生A	【導入：15分間】 9:15~9:30	・集合整列、挨拶、出欠確認、体調把握。 ・本時の流れを説明。 ・準備運動（ウォーミングアップ）
9:15~10:10 ・模擬授業開始。 ・模擬授業の巡視、評価。	教師役学生B	【展開Ⅰ：15分間】 9:35~9:50	・各種目の指導、デモンストレーション。 ・最後は、まとめ・評価をして終了する。
	教師役学生C	【展開Ⅱ：15分間】 9:55~10:10	【展開Ⅰ】と同様。
10:10~10:15 ・模擬授業評価票の回収。 ・後片づけ。			（約5分間）生徒役の学生が模擬授業の評価をする。
10:15~10:30 ・講評			授業担当者による模擬授業担当者に対する評価。授業展開や扱った教材内容の指導方法などに関する指導。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部講師

参考にした。

2016 年度春学期では、1 クラス約 40 名が受講し、2 クラス開講した。各クラス、異なる教員が担当した。全 15 回の授業回数中、各クラス 1 グループ 12～15 名の規模で 3～4 グループに分かれて、グループ単位で模擬授業を展開した。各グループ、1 名が教師役、その他の学生は生徒役を担当した。

表 2：模擬授業の学習課題と担当者の予定表

1-2. 授業運営

本科目で実施した模擬授業は、中学・高等学校の授業時間に倣って 45 分間に設定し、「導入」・「展開 I」・「展開 II」の学習過程で構成した(表 1)²⁾。各学習過程は 15 分間に設定し、それぞれ 1 名の学生が担当する。したがって、毎授業 1 名の学生が模擬授業を行うのではなく、1 回(90 分間)の授業内で各グループ 3 名の学生が教師役として模擬授業を行った(表 1)。

本年度は、全 15 回中 11 回の授業で模擬授業を実施した。他の授業回では、学生が苦手とする種目を抽出し、専門的技術の実践指導と指導方法を紹介した。走種目よりも走り高跳びやジャベリックスロー、砲丸投げといったフィールド系種目に対して苦手意識をもつ学生が多い傾向であった。

11 回の模擬授業中、全ての学生が模擬授業を 2 回担当し、「導入」あるいは「展開」のどちらかの学習過程を教師役として授業担当できるように計画した(表 2)。

保健体育科教育法(陸上) 水1(黒須)									
期日	班	担当者	導入	担当者	展開 I	担当者	展開 II	担当者	展開 II
4月27日	A	1	導入	2	ハードル①	抜き脚・リード脚	3	ハードル②	スタート～1台目
	B	1	導入	2	リレー①	リレーの基本	3	リレー②	バトンパス
	C	1	導入	2	ハードル①	抜き脚・リード脚	3	ハードル②	スタート～1台目
5月11日 <small>雨天の為、5/18に実施</small>	A	4	導入(集合・点呼・準備運動)	5	ハードル③	3歩リズムの維持	6	ハードル④	課題練習
	B	4	導入	5	リレー②	バトンパス	6	リレー③	ゴーマーク設定
	C	4	導入	5	ハードル②	スタート～1台目	6	ハードル③	3歩リズムの維持
5月18日 5/25に実施	A	7	導入(集合・点呼・準備運動)	8	ハードル④	課題練習	9	ハードル⑤	測定
	B	7	導入	8	リレー③	ゴーマーク設定	9	リレー④	課題練習
	C	7	導入	8	ハードル④	課題練習	9	ハードル⑤	測定
5月25日 6/1に実施	A	10	導入(集合・点呼・準備運動)	11	走幅跳①	実測測定	12	走幅跳②	ジャンプ
	B	10	導入	11	リレー④	課題練習	12	リレー⑤	測定
	C	10	導入	11	走幅跳①	実測測定	12	走幅跳②	ジャンプ
6月1日 6/8に実施	A	13	導入(集合・点呼・準備運動)	14	走幅跳③	助走			
	B	13	導入	14	砲丸投①	立ち投げでの突き出し			
	C	13	導入						
6月15日	陸上競技場 教材研究								
6月22日	陸上競技場 準備運動			1	走り幅跳④	課題練習	2	走り幅跳⑤	測定
				1	砲丸投②	サイドステップ投げ	2	砲丸投③	グライド投げ
				1	ジャベリック①	前方にまっすぐ投げる	2	ジャベリック②	短走からの投げ
6月29日	A	3	導入(集合・点呼・準備運動)	4	リレー①②	リレーの基本、バトンパス	5	リレー③	ゴーマークの設定
	B	3	導入	4	砲丸投④	課題練習	5	砲丸投⑤	測定
	C	3	導入	4	ジャベリック③	クロスステップからの投げ	5	ジャベリック④	課題練習・測定
7月6日	A	6	導入(集合・点呼・準備運動)	7	リレー④	課題練習	8	リレー⑤	競争・測定
	B	6	導入	7	走高跳①②	正面跳びからのはさみ跳びへの展開	8	走高跳②	はさみ跳び
	C	6	導入	7	短距離走①	スタート	8	短距離走	スタート～加速
7月13日	A	9	導入(集合・点呼・準備運動)	10	走高跳①	正面跳び	11	走高跳②	はさみ跳び
	B	9	導入	10	ジャベリック①	前方にまっすぐ投げる	11	ジャベリック②	短走からの投げ
	C	9	導入	10	短距離走	測定・課題練習	11	短距離走	測定
7月20日	A	12	導入(集合・点呼・準備運動)	13	走高跳③	背面跳び	14	走高跳④	課題練習
	B	12	導入	13	ジャベリック③	クロスステップからの投げ	14	ジャベリック④	測定・課題練習
	C	12	導入	13	ハードル走④	課題練習			
補講日	陸上競技場								

※「担当者」欄の数字は、グループ内の ID 番号

1-3. 模擬授業

本授業は、担当教員の開始合図と同時にグループ内で教師役学生と生徒役学生に分かれて模擬授業が進行する。ここでは、教師役学生と生徒役学生の役割内容について触れる。

① 教師役学生

模擬授業を担当する学生は、「導入」または「展開 I・II」の学習指導案を担当週の 1 週間前迄に担当教員に提出した。提出された学習指導案の内容によっては、必要に応じて担当教員が指導し、再提出と指導を繰り返すこともあった。学習指導案の様式は、本授業用に作成したものを使用した。本来ならば、幾つかの様式で慣れることも必要であるが、まずは 1 つの様式で完璧に仕上げられることを重視した。また、4 年次の教育実習を考慮して、手書きとタイプ(word)形式による作成方法を指定した(表 3)。

模擬授業の学習課題は、陸上競技の各種目の技術を学習させることを目的とする指導内容とした。具

体的な学習課題は、模擬授業の担当回と学習過程によって事前に学生ごとに割り振られていた（表 2）。

模擬授業当日は、各自が担当する学習過程で必要な用具の準備と事前にグループ内の生徒役学生に学習指導案を配布する。模擬授業の開始合図によって、各グループで模擬授業が展開される。

② 生徒役学生

各学習過程の内容に合わせた教材指導を担当する教師役学生に対して、生徒役を担当する学生は、「導入」、または「展開」の模擬授業終了後の 5 分間を利用して所定の評価票（表 4）を用いて評価した。10 個の評価項目に対して 4 件法による評価と自由記述による形式を採用した。本来、評価尺度を用いる場合、5 件法や 7 件法など奇数による値を設定することが一般的だが、本授業では、評価結果の傾向を明らかにするために中間値を設けずに偶数による値の設定をした。

模擬授業を担当した教師役学生は、生徒役を担当した学生からの評価票と自由記述をまとめ（表 4）、後日、指定された期日までに報告書（表 5）と合わせて提出することとした。

表 3：学習指導案

学 習 指 導 案				
教-ID	-	学籍番号	S114	学生氏名
単元 (運動項目)	時間分の 時間目を設定			内容
日時	平成	年	月	日 () 時 限 目 場 所
対象	中学生・高校生(男子20名・女子20名 合計40名)を想定する。			
本時の目標 (指導観を含む)				
段階・過程	時間 (分)	生徒の学習活動(具体的な内容)	指導上の留意点	
			指導や支援	評価観
準備物(用具・教員、数など)				

※テンプレートはA3サイズに印刷して提出

③ 担当教員

模擬授業中、本科目の担当教員は、各グループの模擬授業の巡視をしながら、教師役学生の指導方法の評価を行った。主な評価内容は以下の通りである。

- a. 時間内（15分間）で行えているか。
- b. 十分な声量、適切な言葉づかいで指導ができていないか。
- c. 生徒が見やすい、分かりやすい見本実技を示し、生徒の理解を確認しながら指導をしているか。
- d. 学習指導案に沿った授業進行になっているか。
- e. 生徒の能力や経過時間、施設状況、天候の変化などに応じて、指導案を変更するなど臨機応変に対応できているか。
- f. 安全に留意した用具の利用、場所の確保、運動指導ができていないか。

表 4：模擬授業評価票

保健体育科教育法(陸上) 模擬授業評価票

2016年 月 日

班-ID -

学籍番号 S114 氏名

※この調査は、授業改善に役立つ情報を得るためのものです。ありのままに答えてください。今日の授業を振り返って、次の項目に当てはまる数値をひて記入ください。

教師氏名

全く当てはまらない 1 2 3 4
当てはまる 1 2 3 4

1 進度のペースで、分かりやすく説明、的確な指導がなされていた。	1	2	3	4
2 安全に配慮した授業展開がなされていた。	1	2	3	4
3 ホイッスルは、必要に応じて適切に吹くことができていた。	1	2	3	4
4 場面転換がスムーズに行われ、不要な待機時間が少なかった。	1	2	3	4
5 評価基準に基づいた学習者(生徒)への評価ができていた。	1	2	3	4
6 上記(5)の評価に対する即言(アドバイス)ができていた。	1	2	3	4
7 「何を習得させたいのか」授業のねらいと道筋が明確であった。	1	2	3	4
8 指導案はわかりやすく、丁寧に書かれていた。	1	2	3	4
9 状況に応じて、指導案の内容を修正することができた。	1	2	3	4
10 運動量の確保が十分になされていた。	1	2	3	4

【授業の感想】上記の評価観点をもとに、具体的に評価をしてください。

表 5：模擬授業評価結果

班-ID	学籍番号	氏名
S114		

月 日 () 限 担当内容

生徒	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均
評価1											
評価2											
評価3											
評価4											
評価5											
評価6											
評価7											
評価8											
評価9											
評価10											
評価11											
評価12											
評価13											
評価14											
											平均

* 自分のID番号欄は斜線にする

生徒	コメント
生徒1	
生徒2	
生徒3	
生徒4	
生徒5	
生徒6	
生徒7	
生徒8	
生徒9	
生徒10	
生徒11	
生徒12	
生徒13	
生徒14	

表 6：模擬授業実践を振り返って

保健体育科教育法(陸上) 2016

【授業実践を振り返って】

班-ID -

学籍番号 S114 学生氏名

1回目 担当単元

2回目 担当単元

3回目 担当単元

まとめ

2. 今後の課題

2-1. 模擬授業の運用

教師役を担当する学生は、自身が担当する学習課題とそれにあった到達目標を設定し、学習指導案の作成から模擬授業当日までの準備時間を経験しながら学習している。しかし、生徒役の学生は、模擬授業を受講することと、模擬授業の各学習過程が終了する度に作成する評価票の記入のみで、他の学生の指導方法や学習指導案から何を学んだかについては確認することができていない。同じ体育教員を目指す学生間で教師役と生徒役を経験しながらの相互評価が欠けていた。

模擬授業の様子をビデオ撮影し、後日、録画映像を見ながら評価する¹⁾機会を採用することも計画したい。2015年度には、模擬授業のビデオ撮影はしたが、映像観察する時間の確保よりも模擬授業の運用が優先されてしまった。

2-2. 学習指導案の作成と指導

体育実技の学習指導案は、授業施設の利用方法、生徒を整列する際の指示内容、運動強度や回数、専門動作について図解されていることが重要だが、学生から提出された学習指導案の9割方が文章のみの記述であった。2回の模擬授業を通じて、1回目の指導案よりも2回目に改善させるケースもあったが、学習課題や学習過程が変わると記述内容すら理解していない学生も見受けられた。インターネット上で閲覧可能な指導案を参考にして作成する学生が殆どで、体育実技の教科書に掲載されている図や写真を用いて作成した学生は2名であった。また、天候に配慮して、屋内施設を利用した指導案を作成するよう指示はしていたが、屋外時の授業の指導案のみを作成するのが精一杯のようであった。

本授業の担当教員は、模擬授業を担当する学生が事前に提出する学習指導案を毎週12～14枚確認し、必要に応じて再提出と指導の繰り返しをしたため、授業時間外の指導にも多くの時間を割くため負担が多かった。

2-3. 教師役学生の指導方法

体育実技の授業で扱う教材を通じて、学習者に何を学ばせたいのか明らかにできない学生が多く、教科の指導ではなく、学生自身が経験してきた運動部活動の指導の延長で模擬授業運営をする学生が見受けられた。最も多いのは、走る距離や運動の反復回数について明確な指示が無かったり、スタート時の合図が事前に説明していなかったケースである。

また、施設環境や天候に応じた指導内容の変更についても適切な判断ができていなかった。特に「導入」を担当する教師役学生は、6月～7月の梅雨の時期にあたる高温多湿の環境下であるにも関わらず、400mトラックでジョギングから開始し、体操、ストレッチの順で進行する傾向が多く、その後の「展開」で扱う運動（種目）内容が全く留意されていなかった。中学校・高等学校の校庭は土のグラウンドが多いため、学習者を地面に座らせたり、仰向け姿勢でストレッチをするのは不向きであるが、その辺りの配慮も欠けていた。

学生の実技による師範能力についても、学生間で差が顕著であった。正しい見本や学習者に何を見せたいのか、理解させるための“見せ方”は、授業現場を繰り返し経験しないと身につかない能力ではあるが、体育実技の教員としてはおろそかにできない課題である。

まとめ

教育法の授業で模擬授業を取り入れる授業運営をはじめて3年経つが、教師役を経験する学生の学習効果をどのように分析するかが次年度以降の課題である。また、生徒役を担当する学生は、模擬授業を受講して何を学んだのか評価できるような方法も必要であろう。

《引用・参考文献》

- 1) 藤田育郎, 岡出美則, 長谷川悦示, 三木ひろみ 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討—授業の「省察」に着目して— 体育科教育学研究 27-1: 19-30. 2011. 3
- 2) 白石晃 教員養成教育における模擬授業の取り組み—「保健体育科指導法 2」の授業実践から— 天理大学学报 233: 99-123. 2013